

# 吉阪隆正フランス留学期日記の研究 – 1950～1952年在仏日記帳の全解読を発端として –

## 目次

第1章	本研究について <ul style="list-style-type: none"><li>1-1 研究目的と背景</li> <li>1-2 対象資料について</li> <li>1-3 研究方法</li> <li>1-4 既往研究と本研究の位置づけ</li></ul>
第2章	カテゴリ分析の結果 <ul style="list-style-type: none"><li>2-1 在仏日記について</li> <li>2-2 挿入資料について</li></ul>
第3章	吉阪隆正在仏期・全学習記録 <ul style="list-style-type: none"><li>3-1 初めに</li> <li>3-2 読書・文献調査</li> <li>3-3 建築施設見学</li> <li>3-4 原稿執筆</li> <li>3-5 スケッチ・絵描</li> <li>3-6 講演会・会議</li> <li>3-7 展覧会</li> <li>3-8 映画鑑賞</li> <li>3-9 演劇・舞台鑑賞</li> <li>3-10 音楽鑑賞</li></ul>
第4章	吉阪の人的ネットワーク <ul style="list-style-type: none"><li>4-1 初めに</li> <li>4-2 アトリエル・コルビュジエの従事者・関係者との交流</li> <li>4-3 在仏日本人との交流</li> <li>4-4 在仏アジア人としての活動</li> <li>4-5 小結</li></ul>
第5章	人文地理学と旅 <ul style="list-style-type: none"><li>5-1 はじめに</li> <li>5-2 パリへ向かう船旅と植民地建築</li> <li>5-3 原動機付自転車Velo Solexの上から見たフランス民家</li></ul>
第6章	考察 <ul style="list-style-type: none"><li>6-1 はじめに</li> <li>6-2 住居学汎論とフランス留学</li> <li>6-3 人的ネットワークと日本・アジアへの視座</li></ul>
第8章	結論 <p>謝辞</p>

## 第1章 本研究について

### 【研究目的と背景】

本研究の目的は、建築家・吉阪隆正（1917-80）在仏時、1950年8月から1952年10月までの大学ノート4冊に書き込まれた日記（以降、在仏日記）と同日記内の挿入資料の解読を行い、もって**吉阪隆正のフランス留学の全貌を明らかにする事**である。吉阪の留学機についてはこれまで少なくない研究が為されてきたが、それらはコルビュジエの弟子としての性格を重視したものが多く、吉阪の網羅的な学習や交流について研究したものは見当たらない。したがって本研究では意識的にコルビュジエアトリエ内での活動とその他のあらゆる活動を並列して、同時に語り、その相互の関係と包括的な吉阪の思考を明らかにする。

①吉阪の全学習記録

②吉阪の人的ネットワーク

③吉阪の旅

<p>2024年2月2日</p> <p>修士論文最終発表会</p> <p>中谷礼仁研究室</p> <p>5222A112-4</p> <p>湊 明人</p>	
--	--

### 【対象資料について】

対象とする資料は、吉阪隆正が留学期間中に記していた日記帳全4冊で、1950年8月23日～1952年7月29日までの707日間を記したものである。707日間の内、約84%の594日の日記が書かれている。更に本日記帳には、挟み込まれて保存されていた資料全221資料が存在する。(以降、挿入資料)挿入資料についても、日記帳の一部とみなし研究の対象とする。



### 【研究方法】

①吉阪隆正在仏日記・挿入資料の解読（日仏英）

②在仏日記記述内容のリスト化・カテゴリーの分析

③挿入資料のリスト化・カテゴリーの分析

上の②と③によって、資料の全体的な性格を明らかにする。

④以上を踏まえた包括的な分析と考察

上記を踏まえて吉阪留学の全貌を表す事項について分析と考察を行う。

④**補足資料として、全44冊のスケッチブックを参照**

吉阪は留学中、スケッチブックと日記帳を携帯して、使い分けていた。分析の為に、補足的にスケッチブックを参照する。

### 【既往研究と本研究の位置づけ】

・倉方俊輔著『吉阪隆正とル・コルビュジエ』王国社 2005

本書は本論文と同時期の吉阪隆正の活動における建築作品や建築理論、さらにル・コルビュジエからの影響を中心として紹介している。しかしル本研究が対象とする在仏日記については部分的な紹介に留まっており、またその内容もル・コルビュジエに関係する記述が主である為、日記帳の包括的な研究とは言えない。本研究が対象としている資料は留学後の吉阪の記述と留学時に家族に向けて頻繁に送られている書簡である。この書簡は日記帳に記された日々の記録を元に書かれていた物であり、日記帳と併せる事でより詳細な吉阪の留学生生活を明らかにすることが可能である。

・福田京「アトリエ・ル・コルビュジエにおける吉阪隆正のプロジェクト担当箇所の特定と考察」東京理科大学、2007

アトリエ・ル・コルビュジエ内での吉阪の担当箇所を明らかにする事を目的としており、その特定材料の一つとして日記帳が参照されている。ル・コルビュジエ財団の所蔵資料との横断的な比較分析が為されており、その事によって吉阪のアトリエ内での詳細な活動が明らかになっている。しかし、本研究も日記帳内のアトリエに関する記述のみを引用しており、その内容は吉阪の留学全体を述べるには不足があると言える。

吉阪の留学において、アトリエ・ル・コルビュジエでの経験は一側面でしか無く、アトリエ外でも吉阪は広く活動し、自身の研究を進めていた。

この事から、本研究ではこれまでの既往研究を土台として、

①**吉阪隆正在仏日記の全体を初めて解読し研究すること**

②**それによって、ル・コルビュジエ以外の側面に着目**

③**必要に応じて、既往研究に対して精密な指摘を与えること**を目標とする。

### 第2章 カテゴリ分析の結果

#### 【在仏日記について】

記述内容をA-Jまでのカテゴリに分類し、日毎のリストを作成した。またそのリストに基づき、週毎にその記述の量を濃淡で示した。A-Jのカテゴリはそれぞれ以下の通りである。

	カテゴリ	内容		カテゴリ	内容
A	備忘録	寝食の記録等の日常的な記述	F	ル・コルビュジエについて	ル・コルビュジエに関する意見等
B	思索	思う・考える	G	アトリエル・コルビュジエの従事者に関する記述	アトリエル・コルビュジエ従事者らとの交流等
C	学習記録	読書・映画・展覧会等の記録	H	アトリエル・コルビュジエ計画進行	アトリエにおける計画進行の記録
D	旅の印象	旅路の景色等の記録	I	ル・コルビュジエの発言録	ル・コルビュジエの発言に関する意見等
E	交友関係	吉阪のあらゆる交友関係			

これにより、在仏日記のカテゴリーによる全体的な性格が明らかになった。また、既往研究との比較により、吉阪のアトリエ内外での活動の関係性も述べることが出来る。

また、精密な読み下しとコンテクスト分析によって次章以降の分析と考察の為の基礎資料が整ったといえる。

#### 【挿入資料について】

挿入資料に対しても、精密な解読が完了している。また、資料の性質を11項目に分類してリスト化した物が以下の図である。これにより、挿入資料の全体的な性格が明らかとなった。

### 第3章 吉阪隆正在仏期・全学習記録

「日記カテゴリ分析による在仏日記の性格」によって、日記内記述における学習記録の豊かさが発見された。**全459件**の吉阪の全学習記録は**9つの分類**で整理できる。

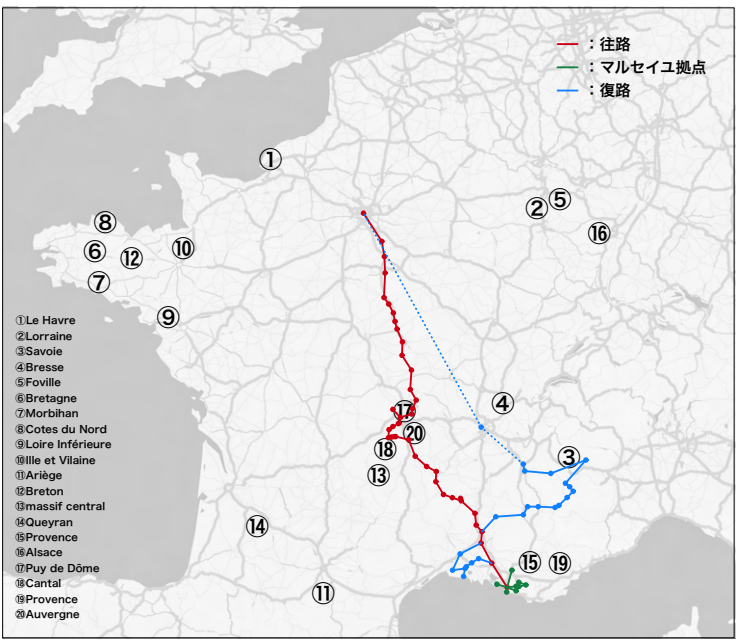
#### 3-1 吉阪の懐事情

次節以降、学習記録の分析を進めるに当たり、1950年頃のフランスフランの現代に於ける価値を確認した。**1fr=8.5円。**

#### 3-2 読書・文献調査

**全54冊**の読書記録、フランス国内**20地域**に対する文献調査。吉阪の読書の中で**フェミニズム**や**家族制度**、**夫婦と性についての問題への関心が見られる**。「第二の性」を読み、「住居学の構想にヒントあり」と綴っている。

フランス地域の文献調査については、下図のような20の地域。



### 第4章 人的ネットワーク

①アトリエル・コルビュジエ：38名（住総研から新たに9名）

②在仏日本人：77名

③①以外の外国籍の人物：105名

人物名	在仏日記内交際日数	挿入資料内登場有無	出身国
① 先行研究・書籍で従事者として記録の残る人物			
Balkrishna V. Doshi	31	有	インド
Iannis Xenakis	25	有	ギリシャ
Germán Samper Gnecco	21	－	コロンビア
Aristomónis Provelenghiós	20	－	ギリシャ
André Wogenscky	19	有	フランス
Georges Sachinidis	8	有	ギリシャ
André Maisonnier	7	－	フランス
Fernand Gardien	7	－	フランス
Jacques Masson	5	有	フランス
Rogelio Salmona	5	有	コロンビア
Valencia	5	－	コロンビア
Guy Lemarchands	4	－	フランス
Nadir Afonso	4	－	ポルトガル
Perez Chenis	4	－	パナマ
Walter Jonas	4	有	スイス
Charles Clémot	3	－	ウルグアイ
Henri Bruaux	3	－	不明
Charlotte Perriand	2	－	フランス
Jacques Michel	2	有	フランス
Jean-Claude Mazet	2	－	フランス
Olek Kujawsky	2	－	ポーランド
Durand (Jeannine Durandか)	1	－	不明
Roger Andréini	1	－	フランス
stielér	1	－	不明
金重業	0	有	韓国
② ①の記録には残らないが、日記本文等から従事者としての性質が認められた人物			
Noël	6	－	不明
Dunet	5	－	不明
Mme Jeanne	3	有	フランス
Bertucci	2	－	イタリア
Costantine Andréou	2	－	ブラジル
Janice	2	－	不明
Vedat Ali Dalokay	2	－	トルコ
W.S. van de Erve	2	－	オランダ
Agard	1	－	不明
③ アトリエへの直接的な関与は認められないが、複数のアトリエ従事者との重要な交流が認められた人物			
Claude Le Goas	7	－	フランス
charles barberis	2	－	フランス
Bernard Laffaille	7	－	フランス
Hernán Vieco Sánchez	2	－	不明

## 第6章 考察

吉阪が留学から帰国後に執筆する『住居論』の本論の初めを見ると、「以下11節に分けて述べられることは、まだこの学問が体系だてられていない今日としては、ほんの一部の例を掲げるにとどまることをお断りしなくてはならない。また具体的な実例が主としてフランスから引用されているのは、資料の関係で住居史との重複を避けたいためであった。」とある。

留学前に執筆した「住居学汎論」の章立てと比較するとフランス時代に学んだ事が顕著に反映されている事が分かる。

例えば、本論p131「男女の住居に対する考え」節、p151「理想の代償として重点の置かれる家具」節はそれぞれ男女については、Femme Frigide（Wilhelm Stekel著）やSimone Beauvoir「第二の性」を読んだこと。Modulorにおける女性への寸法的弊害、家具については、アトリエル・コルビュジエ内で226の検討をしたこと（家具を中心に）がその原因として考えられる。

このような住居学への変化を与えた要因の一つとして、吉阪が留学中、長い時間をかけて取り組んだ「フランス民家調査」があり、その文献調査の実証の機会の一つが「パリ・マルセイユ間原動機付き自転車旅行」だった。実際に住居論の中には、留学期間中の学習記録に残るBibliothequeNationaleでの調査した土地とその情報が多数見られる。

